

ふくろうのつぶやき

——ことばはおしみおしみ——

真壁 伍郎

私たちの文庫にも、時々、お客様が来てくださいます。子どもの本にかかわりを持つていてる人、文庫とやらでいったい何をやっているのかと、興味津々でやってこられる人。さらに、人の出入りの多い私たちの家をたまたま訪ねてこられたばかりに、文庫の子どもたちにもお目見えという人もおられます。



文庫は、どんなお客様も歓迎します。ただし、「ただ見」はできないことになっています。かならず、お客様にも何かお話を聞いていただきます。絵本の読み聞かせでも、昔話を語るのもけっこうです。これは報道関係の人のように、「ただ聞くだけ」を商売にしておられる方も、例外ではありません。その人がやっておられる仕事のことでもいいですから、子どもたちに話してくださいとお願いします。

いつか読書週間の頃でした。市役所の広報担当の方が取材に見えられました。その時も例によつてお願いしました。

「どんなお仕事をしていらっしゃるのかでもいいですかから、子どもたちにお話していただけませんか」

とつさのことで、この方は戸惑われたのでしょうか。子どもたちの前で、すっかり上がつてしまわされました。

「その、私どもは、市民との連係を深めることを課題にいたしまして……」

まるで大人相手のように、むづかしい言葉で話しださ

れ、子どもたちはあっけに取られています。でもやがてそれに気づかれたのでしょう。汗を流しながらも、あとは立派にお話をしてくださいました。

市役所に六、七年勤めたことがあるわたしには、この方の苦労がよく分かりました。いざお前の仕事は何かといわれると、まるで職務分掌に書いてあるようなことしか出てこないので。子どもに自分の仕事のことなど説明するような場面に、わたしたちはまず遭遇することはありません。

いや、もしかしたら、子どもにたいしてだけでなく、夫婦の間ですら、相手が何をしているのか分かっていないことが多いようです。留守をまもり、家事と育児に追いまわされる妻としては、夫は美人社員に囲まれて、さぞかしけつこうなお勤めをしているのだろうと思つてしまます。テレビドラマがこれにいっそう拍車をかけます。真剣に仕事に取り組む場面や、そこでの焦り、不安ほど映像にならないものはありません。

何を、どんな思いでやっているか。これは語つてくだ

きることによつて、一番よく伝わります。

子どもたちも、大人と一緒に暮しながら、その大人が日常何をしているかとなると、ほとんどにも知らないことが多いのです。

社会の仕組だとか、人々の暮しと仕事など、あれこれ学校で学んでいるはずなのですが、その具体的なこととなると、まるで図鑑の絵を見ているような印象しか持つていません。

なんとおたがいに他人のことに無関心なんだろう。これでは社会が遠い存在になってしまつても仕方がないなと、いつも思はれます。そんなわけで、わたしたちの文庫は、本と出会うだけでなく、人とも出会う場所にしようと考へきました。

教育の目標にあげられる、子どもたちの社会性を育てようは、言葉としては立派ですが、それがいつまでたつても、お友だちと仲良く、の程度を出ないのはなぜでしょう。何をして、どう生きてゆこうとするかには、到底いたらない。学校教育の最終段階まで来た大学生たちをみて、よく考えさせられます。たまたま成績が、教育学

部程度だったからとか、看護学校程度だったからという学生があまりにも多い。過去の成績の結果しか生きていられない感じです。

きっとそれだから、親も子どもの教育に励んだのでしよう。よい過去を作つてやれば、よい未来が望めると。子どもが未来にむけて、これからどう生きようかと悩んだり考えたりすれば、それは勉強の妨げとしか映りません。原因、結果の鎖のなかにがんじがらめになつてゐる当世風の考え方みたいして、最近は、人間は過去の結果を生きるだけでなく、むしろ未来にむけて、目標を目指して生きる存在だといわれ始めています。

こんなわたしに誰がした、と人に責任を転嫁するのではなく、わたしはこう生きるのだという主体性をもつと重視しようというわけです。

その主体性に火がともるためには、生きた人との出会いが一番です。いきいきと生きている人、働いている人、そうした人が目の前にいる。自分に語りかけてくれる。それだけでも、子どもたちは言ひ知れない力強さを

感じ、将来の夢をかり立てられるようです。自分の仕事

に喜びをもち、打ち込んでいる人は、みな語るべき内容をたくさん持つておられます。いろいろな人が文庫に来て話してくださるのを聞いていて、いつもそれを痛感しています。

家で、お父さんの仕事の話をよく聞いていたのでしょうか。いたる君は、

「ほくおおきくなつたら、大工になるんだ」

と誇らしげに、なんども語っていたのを思い出します。

子どもの前に立つて話をするとなれば、わたしたちはあらためて自分の仕事を振り返つてみます。そして子どもたちに、それをできるだけ分かりやすく説明しようとします。その振り返りと、説明のための努力が、なかなかすばらしい。

ある助産婦さんは、赤ちゃんが生れるときの様子を話してくれました。実際に見ておられることですから、話の上手下手よりも、事柄そのものの迫力が違います。こ

れを聞く子どもたちの真剣な顔。

「赤ちゃんは、お母さんのおなかの中にいる時は、頭を下にしているの。知っている？ そして、生れるときはね、お母さんは苦しいんだよ。でも、赤ちゃんももつと苦しいと思うの。そして、赤ちゃんが無事オギヤと生まれると、たいていのお母さんは、涙を流して喜ぶよ。嬉しいもんね。みんなのときもきっとそうだよ」子どもたちは、うなずきながら聞いていました。

助産婦さんの仕事の大切さも分かつたでしょうし、自分が生れたときのことも、あれこれ想像していたに違いありません。さっそく、翌週、何人かの子どもが、お母さんとそのことについて話したよ、といっていました。遠い海外で医療のために働いてこられた人の話も聞きました。インドやネバールでのこと。古切手を集めめたのが、このお医者さんや看護婦さんとつながっていたのかと、広いようで狭い地球上のあちこちの国の人たちのことについて語りました。

外国からのお客様もあります。わたしの通訳を交え

て、その国の風土や、学校、子どもたちのこと、そしてその国の面白い話をしてもらいます。実際耳で聞けば、外国語もそう縁遠いものではありません。二人のスウェーデンの人来たときなどは、スウェーデン語と英語と、日本語の口移しのお話となりました。そして、『三びきのやぎのがらがらどん』のトロルのことを、詳しく聞くことができました。橋の下に住むトロルの姿が、子どもたちには、一層よく見えてきたことでしょう。

こんな言葉があります。

「発見の真の旅とは、新しい風景を探すことではなく、新しい目で、他人の目で、この地球を見ること。百人の他人の目で、百の新しい地球を見ることです」

本当にそうだと思います。いろいろ世界をみてまわる割りには、いつも日本人の国際感覚が育たないではないかとよく言われます。百聞は一見にしかずといった感じで、いくらくら多くのものをみても、目そのものは変わりません。

他人の目で見るには、その人の話に耳を傾け、その人が見たり感じたりしているままに、世界を見ようとすることがあります。わたしの目をどれくらい相対化できるか。それにかかるいます。それには、一にも二にも、人の語ることに耳を傾け、聴こうとするこです。しかも、その「聞く」も、単に音が門の外から聞こえてくるといった「聞き」方ではなく、「聞く」の文字が示すように、耳、プラス、目と心、つまり、耳だけではなく目と心をまっすぐ相手に向けて理解しようと耳を傾けること。カウンセリングでは、この「聞く」をとても大切なこととして、「聞く」とは区別しています。

さいわい、子どもたちは、お話を耳を傾けていると実践しているように思います。それほど自然に、語られた世界に子どもたちは入り込んでしまっています。ですから、子どもほど語りの世界に近い存在はないのかもしれません。「わがことのようにして聞く」、この能力があつてはじめて、わたしたちは異なる世界に共感し、泣く

者とともに泣き、喜ぶ者とともに喜ぶことができるのです
はないかと思います。

『人間学』なる本も著わしている哲学者のカントは、

生涯、自分の生れ故郷、ケーニヒスベルクの町を出たこと
がなかつたといいます。それでいて彼は、実に多くの
人のことを知り、世界大、いや宇宙の大の思想をもつこと
ができました。カントについては、奇人めいた話をよく
聞きますが、実際はとても人間好きな、社交的な人で、
何よりも人の話にはよく耳を傾けたといいます。恐らく
そうすることによって、よほど多くの他人の目で、世界
を見ることができた人なのでしょう。

子どもたちにお話をするときは、くどくどしい前置き
は禁物です。むかし学校の先生をしておられた方が、文
庫の子どもたちにお話をしくださることになりました。
た。

子どもたちは期待してお話を始まるのを待つていま
す。ところが、この方は、久し振りに子どもたちのまえ

に立たれたのでしょうか。あれこれ長い前置きをなさいま
した。とうとう、待ち切れなくなつた男の子が、思わず
大きな声でいつてしましました。

「そんげんいいつけ、はよ、はなししねかな！（そん
なことはいいから、早く話しないかな）」

まったくそのとおり、わたしたちの話は、前置きが多
すぎます。また、長すぎます。小学校のころ聞いた校長
先生の話など、後になつてもさっぱり覚えていないの
は、前置きが長すぎたせいもあるのかもしれません。子
どもたちのまえに立つたら、すぐに本論に入りましょ
う。面白い話なら、なおいっそうそのことが大切です。

さらに、戒めるべきは、教訓です。ある時、子どもた
ちに本を読んでやりながら、わたし自身その物語にとて
も感動してしまいました。よせばいいのに、本を読み終
えて、その感動を要約しようと思つたのでしょう。やお
ら、わたしはそこで得た教訓を話し始めようとしまし
た。するとすかさず、男の子の声、
「おじさん、声がちがうよ」

すっかりまいってしまいました。たしかにそのとおり。教訓を述べている声が、楽しくお話を語っている声と同じであろうはずがありません。子どもの耳は敏感です。響きの違う声を、その子は本能的に拒絶します。せっかく楽しく、そして、心を動かされたお話です。そつと持つて帰りたいし、暖めておきたいのです。いまさら、さて、この話は、などと、あれこれ言われるのは子どもにとって大迷惑なのです。

お話は楽しむだけだけそこから汲み取ればよい。考え方、とりが必要なだけそこから汲み取ればよい。考え方、

感動を誘うようなお話なら、いくら汲んでも汲み尽くせないような泉が、そこにこんこんと湧いているはず。それに、押しつけられた教訓が、人を内側から動かす力になどなり得ようはずがありません。教訓はやめておきましょう。

「声がちがうよ」の指摘は、まことに痛い指摘でした。そのとき以来わたしは時々、いま、自分はどんな声で話しているかなと思うようになりました。

言葉の調子、声の響き、それに言葉の一つ一つ。思えば思うほど、なんと無造作に、しかも感情のおもむくままに語っていることか。とくに、これが子どもたちと向かい合っていると、どうしても力の関係のようなものが頭をもたげてきます。上から下へ、押しつけるような言い方。そして、声の調子。言い聞かせるといった態度が、言葉にも響きにも表われてきます。よくもまあんな言い方をしてと、あとで恥ずかしい思いをします。いい加減な言い方を、見えない力の関係で押し通しているのです。

ドイツの大学の医学部で教えていたるわたしの兄から面白い話を聞きました。対等の関係を重んじるお国柄ですから、講義中に学生たちからよく質問を受けるのだそうです。そうしたなかには、外国人教師に対する嫌がらせとも思えるような、発音や表現の仕方に關する意地悪な質問もあるそうです。ところがこれが、医師の国家試験の口答試問の場になると、試験官を仰せつかつてゐるわたしの兄は、ただ一度も聞き返されたことはないといい

ます。どんな下手な発音でも、相手はちゃんと聞きとつている。

「そんなものだよ」

兄は、そうもらしていました。

力の関係が働けば、そして、その関係を利用しようとなれば、わたしたちの言葉も、声の調子もどんどん変わっていきます。親子、夫婦、きょうだいの上下関係、学校の教師と生徒、会社の人間関係、どこにもここにも、

この言葉の調子と響きの奇妙な使い分けが満ちていまします。「裸の王様」ではありませんが、子どもたちだけが、その微妙なちがいを、はつきり聞き分けているのかもしれません。子どもたちは、心のなかでしきりに言っていることでしょう。

「○○さん、声がちがうよ」

読み聞かせにしろ、お話にしろ、よほど立派に読んだり語つたりしなければならないという思いが一般にあるようです。お母さんたちからよく、どんなふうに読んで

やつたらいいのでしょうかね、とたずねられます。朗読となると、テレビやラジオで聞く、俳優や声優さんたちのことを思うのかもしれません。それが高じて、読み聞かせの勉強をしなければ、などという声も耳にします。それにたいして、子どもの読書にかかわっている人の多くは、「その必要はありません。心を込めて読んでやりさえすれば、それでいいのです」と答えておられます。まったくそのとおりだと思います。

ところが、これがまた誤解を招くのです。心を込めれば、当然、俳優がするように、大袈裟な声や表現になると思うのです。そして結局、子どもたちに本を読んでやりたいけど、声はよくないし、上手な読み方ができないからと、子どもたちに幸せが及ばないことになってしまします。

最近出版されて話題になつている『グリムおばさんとよばれて』という本があります。ドイツのプロの昔話の語り手として有名な、シャルロッテ・ルジュモンという人のメルヒエンを語つてきた歩みの記録です。メルヒエ

ンにどんな不思議な力が秘められ、それを語ることがまた、どれほど人を支える力になるか。これがとてもよく描かれています。

この著者のルジュモンさんは、どんな劇的な調子で語られたのだろう。当代一流となれば。誰しもそんな疑問を持つてしまいます。

わたしの手もとにその語りのテープがあります。それを聞いてみると、案に相違して、その語りは単純そのものです。淡々と、低めの声で、静かに語つておられます。わざとらしい抑揚や、テンポの激しい変化はありません。そうしたものは、あえて避けているようにも見えます。

心を込めるということは、決して、不自然な、大袈裟な言いまわしをすることではないのです。素晴らしい詩

の朗読をなさる女優の長岡輝子さんに、いつかその秘訣をおたずねしました。そしたら、おっしゃるには、詩を読むときには、どう声に出して読むかよりは、どれほど深くその世界がイメージできるかを問題にし、そのため

の努力をなさるのだそうです。

たしかにそうでした。宮沢賢治の詩一編の朗読のために、長岡さんが調べたり、読んだりしておられるこの、なんと多いことか。

子どもの本ならだれでも読めると、行き当たりばったりに本を取り出して、読み聞かせをするという人がいます。恐らくこんな場合、読み手の物語についてのイメージはさほど深いものにはなっていないうだろうと思います。字面を読んで、世界は深く伝わりません。これは、不思議というほかありません。読んでやるなら、まず自分がそのイメージを深めること。細かいところまで、いちいち思い浮べることができれば、語られる世界はいっそう生き生きとしてきたます。

コンロにかけた鍋のことを気にしながら、本を読んでやれば、子どもが聞いているお話のなかに、鍋がひょこひょこ顔を出しているにちがいありません。読み手や語り手が、物語を楽しみ、その世界に入っていないなら、聞き手はどうていその世界を楽しむことなどできないの

です。一場面一場面、言葉にイメージを添えながら話を進めるとなれば、読む速度もそう速くはなりません。どうも、その物語に即した、読みの速さというものがあるようです。

心を込めるとは、そうしたことです。声がよからうが悪かろうが、自分が楽しんで、深く味わっている世界は、そのまま子どもたちにも伝わります。これを「話し」ではなく、「語り」だとも言います。言偏に舌と、言偏に吾のちがいです。語りには、自分の思いが込められている。

何歳になつても、語りを聞くのは楽しいものです。そうであれば、何歳になつても、読み聞かせを聞くのは楽しいはずです。文字が読めても読めなくとも、心を込めて読んでくれる人がいれば、その人の存在が嬉しいし、その物語も生きてきます。

わたしが昨年訪れた、スイスの女流詩人、ホールさんの家庭でもそうでした。高齢になつても、詩作と日々の聖書についての深い默想を書き続けておられるご夫人

に、夕食後のひととき、ご主人は本を読んであげておられました。夫人のためにと思われてのご自分の読書のかからの読み聞かせでした。ヨーロッパ各地に多くの読者を持つておられる、ホール夫人の働きの陰に、ご主人のこうした思いやりの業があつたのでした。

「すべてことばはおしみおしみゆうべし」

良寛の有名な言葉を、ふくろうがつぶやいています。おしむとは、慈しみを認めること。愛のない言葉は語るな。これは、良寛がみずから戒めとした言葉でした。

（新潟大学医療技術短期大学部）